以下開き不良

初等科國語

第六學年前期用

七

文部省

文部省圖書館蔵書

目録

一　黒龍江の解氷……一
二　敬語の使ひ方……二
四　見なさば……四
五　源氏物語……五
八　……八
十　……十
十一　雲のささぶね……十一
十三　山の朝……十三
十四　燕岳に登る……十四
十　月光の曲……
十一　朝顔に……
十二　古事記……

黒龍江の解氷

五尺もある厚い氷、
遠い兩岸の間をぎつしりと張りつめてゐた氷、
その下で、眠つてゐた黒龍江が、
ひとつ大きなあくびをしてから、
春のいぶきをいつぱいに吸ひ込んだ。

めりめりと氷が割れる、
碎ける、
地響きをたてながら。
半年も地面のやうに動かなかつた川が、
今、動きだした。
あちら、こちらに川波が光りだした。
ああ、自然の大きな脈搏。

ウスリー江をのみ、
はるかオホーツクの海へ向かつて、
「はあ。」と冬のなごりを吐く。

暗黒色の流れにあふられ、
氷塊と氷塊がつきあたり、
噛みあひ、のしかかり、
でんぐりかへり、
群がつて流れる。

やがて黒龍江は、やさしい手をひらげ、
わが子のやうに滿洲をだきかかへて、
春の歌を歌ふ。

二　敬語の使ひ方

文化の進んだ國、教養の高い國民にあつては、禮儀を重んじ、ことばづかひをていねいにすることが、非常に大切なことになつてゐる。特に、わが國語には敬語といふものがあつて、その使ひ方が特別に發達してゐるから、ことばづかひをていねいにするためには、せひとも敬語の使ひ方をよく心得ておかなければならない。

まづ相手の人に對して尊敬の意を表すために、特別なことばを、われわれは常に用ひてゐることに氣づくであらう。相手を「あなた」といふのが、すでに敬語である。また、相手や目上の人の動作を述べるのに、「いらつしやる」とか、「めしあがる」といふのも、それである。

相手を尊敬するためには、自分のことを謙遜していふのがわが國語のいき方で、これも敬語のうちにはいる。

自分のことを「わたくし」といふのが、すでに謙遜しことばであり、「行く」「食ふ」「する」も、「まゐる」「いただく」「いたす」などいふのが普通である。

私もまゐりませう。

もう十分にいただきました。

それ故、自分のことや目下のもののことを、

私はまだめしあがりません。

妹たちも、きのふ祝賀式にいらつしやいました。

などいつては、もの笑ひである。

しかし、自分の動作であつても、それが相手のためにする場合は、

私が御案内申しませう。

御心配申しあげました。

では、一通りお話いたします。

のやうに、「御」や「お」をつけて敬語にするのである。相手のすることに、「御」や「お」をつけて敬ふのは、いふまでもない。

深して御心配いただきいきます。

お志、ありがたう存じます。

父・母・兄・姉・をぢ・をば等は、目上の人であるから、それを相手とする時、

おとうさん、どこへおいでになりますか。

をばさんは、どうなさいます。

と敬つていふのである。しかし、一たび他人の前へ出た場合には、自分のことを謙遜していふのと同じく、自分の身内の者のこともまた謙遜していふのである。だから、

おとうさんがよろしくおつしやいました。

おかあさんは、今日おいでになりません。

私のをぢさんは、大阪にをられます。

ねえさんは、お仕事をしておいでです。

といふよりは、

父がよろしく申しました。

母は、今日まゐりません。

私のをぢは、大阪にをります。

といふのが、相手に對して禮儀のあるいひ方である。ただ自分の身内でない目上の人のこととなると、他人の前でもやはり敬つていはなければならない。

いつぱんに、女は男よりもいつそうていねいにものをいふのが、わが國語のならはしである。したがつて、女の使ふ敬語には、やや特殊のものがある。多くは家庭で用ひる物品などに對して、「おなべ」「おさかな」「お召物」とか、あるひは、「汁」を「おみおつけ」などいふのがその例である。「行く」「來る」を「いらつしやる」といふなども、女らしいことばである。今日では、男も混用したり、あるものはいつぱんに使用されたりするが、それが度を越すと、かへつてばかていねいになつたり、また柔弱に聞えたりする。それに、何でも「御」や「お」をつけさへすれば敬語になると思つたり、敬語を使ひさへすれば禮儀になると考へたりするのは、大きなあやまりである。敬語の使用は、禮儀にかなふとも

に、常に適正であることと、眞の敬意、すなはち敬ふ眞心がことばに現れることが、最も大切である。

敬語の使ひ方によつて、尊敬や謙遜の心をこまやかに表すことのできるのは、實にわが國語の一大特色であり、世界各國の言語にその例を見ないところである。古來わが國民は、皇室を中心とし、至誠の心を表すためには、最上の敬語を用ひることをならはしとしてゐる。さうして、また長上を敬ふ家族制度の美風からもていねいなことばづかひが重んじられてゐる。わが國語に、敬語がこれほどに發達したのは、つまりわが國がらの尊さ、昔ながらの美風が、ことばの上に反映したのにほかならないのである。

三　見わたせば

素性法師

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける

紀貫之

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

よみ人しらず

白雲にはね打ちかはし飛ぶかりの數さへ見ゆる秋の夜の月

能因法師

山里の春の夕ぐれ來て見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける

西行法師

道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ

藤原顯輔

秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいづる月のかげのさやけさ

四　源氏物語

紫式部は、子どもの時から非常にりこうでした。兄が史記を讀んでゐるのを、そばでじつと聞いてゐて、兄より先に覺えてしまふほどでした。父の爲時は、

「ああ、この子が男であつたら、りつぱな學者になるであらうに。」

といつて歎息しました。

大きくなつて、藤原宣孝の妻となりましたが、不幸にも早く夫に死に別れました。そのころから紫式部は、筆をとつて有名な源氏物語を書き始めました。

そののち上東門院に仕へて、紫式部の名は一世に高くなりました。式部は、文學の天才であつたばかりか、婦人としてもまことに圓滿な、深みのある人でした。

父爲時が願つたやうに、もし紫式部が男であつたら、源氏物語のやうな、かな文は書かなかつたでせう。當時、あつたからです。しかし、かな文であればこそ、當時の國語を自由自在に使つて、その時代の生活をこまやかに寫し出すことができたのです。かう考へると、紫式部はやつぱり女でなくてはならなかつたのです。

源氏物語五十四帖は、わが國の偉大な小說であるばかりでなく、今日では、世界にすぐれた文學としてほめたたへられてゐます。

次にかかげる文章は、源氏物語の一節を簡單にして、それを今日のことばで表したものですが、ただこれだけで見ても、約九百年の昔に書かれた源氏物語が、いかによく人間を生き生きと、美しく、こまやかに寫し出してゐるかがわかるでせう。

一

のどかな春の日は、暮れさうでなかなか暮れない。きれいに作つたしば垣の內の僧庵に、折から夕日がさして、兩側はみすがあげられ、年とつた上品な尼さん

が佛壇に花を供へて、靜かにお經を讀んでゐる。顏はふつくらとしてゐるが、目もとはさもだるさうで、病身らしく見える。そばに、二人の女がすわつてゐる。時々、女の子たちが出たりはいつたりして遊んでゐる中に、十ばかりであらうか、白い着物の上に山吹色の着物を重ねて、かけ出して來た女の子は、何といふかはいらしい子であらう。切りそろへた髪が、ともすると扇のやうに廣がつて、肩の邊にゆらゆら掛るのが、目だつて美しく見える。どうしたのか、その子が尼さんのそばへ來て、立つたまましくしく泣きだした。

「どうしました。子どもたちと、いひ合ひでもしたのですか。」

といひながら、見あげた尼さんの顏は、この子とどこか似たところがある。

「雀の子を、あの犬きが逃したの。かごに伏せておいたのに。」

と、女の子は、さもくやしさうである。

そばにゐた女の一人は、

「まあ、しやうのない犬きですこと。うつかり者だから、ついゆだんをして逃したのでせう。せつかくなれて、かはいくなつてゐたのに。鳥にでも取られたらどうしませう。」

かういつて、雀をさがしに立つて向かふへ行つた。それは、その子の乳母であるらしい。

尼さんはもの靜かに、

「いやもう、あなたはまるで赤ちやんですね。どうして、いつまでもかうなんでせう。わたしがこんなに病氣で、いつとも知れない身になつてゐるのに、あなたは雀の子に夢中なんですか。生き物をいじめるといふことは、佛樣に對しても申しわけのないことだと、ふだんから敎へてあげてあるでせう。さあ、ここへちよつとおすわりなさい。」

子どもは、おとなしくすわつた。尼さんは、子どもの髪をなでながら、

やんでは困りますよ。もうあなたぐらゐになれば、もつともつとおとなしいはずです。さうさう、なくなられたあなたのおかあさんは、十二の時おとうさんをおなくしでしたが、それはそれは、よく物がおわかりでしたよ。今にでも、このおばあさんがゐなくなつたら、いつたいあなたはどうなさらうといふのでせう。」

さすがに子どもは、じつと聞きながら目を伏せてゐたが、とうとううつ伏せになつて、泣き入つてしまつた。とたんに美しい髪が、はらはらと前へこぼれかかる。

二

雀の子が逃げて泣いた紫の君は、その年の秋おばあさんに死なれて、たつた一人この世に取り殘されてしまつた。

ほどといふよい髪でせう。でも、かういつまでも赤ちゃ

とになつた。あの乳母や犬きも、紫の君といつしよに引き移つた。

源氏は、小さな妹でもできたやうに、いろいろと紫の君のめんだうを見てやつた。紫の君も、源氏をほんたうのにいさんだと思ふほどなつついて來た。

しかし、紫の君は、やはりおばあさんのことを思ひ出しては泣くことがある。この不幸な子を慰めるために、源氏は繪をかいて見せたり、人形を求めてやつたりした。

お正月になつた。元日の朝、源氏は、ちよつと紫の君のゐる部屋へ行つてみた。さうして、

「どうです。お正月が來たから、あなたも少しはおとならしくなつたでせうね。」

といつた。

りつぱな書棚に、たくさんの人形や、家や、車が並べてある。紫の君は、それを部屋いつぱいにひろげて、

人形遊びにいそがしい。

「豆まきをするつて、このお人形さんを犬きがこはしました。わたしがつくろつたのですよ。」

と、さも大變なことでもあるやうに、紫の君は源氏にいつた。

「よしよし。あとで、りつぱにつくろはせてあげよう。今日はお正月だから、泣いてはいけませんよ。」

といつて、源氏は出て行つた。

紫の君は、人形の一つをおばあさんと呼んでゐる。お正月だから、きれいな着物を着せてあげた。

「さうさう。このおにいさんにも、いい着物を着せてあげなければ。」

さういつて、今一つの人形にも美しい着物を着せた。

「さあ、御參内だ。車にお召しください。犬きや、おまへはおにいさんのお供をするのですよ。」

「はい。」と答へて次の間から出て來た犬きが、その車

庭では、うぐひすが、美しい聲で「ほうほけきょ。」と鳴いた。

五　姉

今日、ねえさんがお嫁入りをします。さう思ふと、心がちつとも落ち着きませんでした。先生のおつしやることが、つい私の耳をすり通りします。教室のそとは、うららかな初夏です。屋根で雀がちゆうちゆう鳴いてゐます。あの雀は、のんきでいいなあ。ほんたうに、あのねえさんが、よそのの人になつてしまふのかしら。何だかうそのやうだ――と思つたとたん、はつとしました。先生の目が、みんなの笑つた顔が、私に集つてゐます。先生が、私に何かおつしやつたやうです。顔が火のやうになるのを、私は感じました。

午後、急ぎ足で學校の門を出ました。歸つてみると、

髪結ひさんが、一生けんめいに、ねえさんのお支度をしてゐるところでした。きれいに髪を結つて、晴れ着を着せられたねえさんは、まるでよその人のやうに見えます。分家のをばさんが、

「ああ、いいお嫁さんができました。」

といつて、ほめてゐます。おかあさんも、そばでにこにこしながら眺めてゐます。

お座敷では、山田のをちさんとをばさんが、おとうさんや分家のをちさんなどと話をしてゐます。

何だかさびしい氣がして、私は自分の部屋へもどりました。心を無理にしづめようとして雜誌を開きましたが、字も翫も、てんで目にはいりません。

ふすまがすうとあいて、着かざつたねえさんがはいつて來ました。

「雪ちやん。」

少しかすれた聲でした。

「ありがたう。私がゐなくなつても、さびしがらないで、よく勉強してくださいね。」

「はい。」

さういへば、よくねえさんにいろいろ教へていただいたものでした。

「生まれた家を出て行くのです。どうぞ私に代つて、おとうさんやおかあさんを、だいじにしてあげてくださいね。おかあさんは、さうお丈夫ではないんですから。」

私はだまつてうなづきました。「ねえさん、これまでずゐぶんわがままをいつてすみませんでした。」――それがのどまで出てゐるのですけれど、とうとういへないでしまひました。

夕方、迎への車が來ました。ねえさんは、山田のをちさんとはいつしよに、車に乘りました。

その夜、おとうさんも、おかあさんも、日ぐせのやうに「めでたい、めでたい。」といひながら、話はとだえがちでした。にいさんだけが、時々おどけたことをいつてみんなを笑はせました。

六　晴れ間

さみだれの晴れ間うれしく、
野に立てば
野はかがやきて、
白雲を
通す日影に、
はや夏の暑さをおぼゆ。

行く水は少しにごれど、
せせらぎの
よろこびを
歌ふがごとく、
行くわれを迎ふるごとし。

田園のつづく限りは、
植ゑわたす
早苗のみどり。
山遠く
心はるばる、
天地の大いなるかな。

ふと見れば、道のほとりに、
つつましき
姿を見せて、
濃きさるりの
色あざやかに、

澄んだ青空に、はけで輕くはいたやうな、または眞綿を薄く引き延したやうな白い雲の出るのを、卷雲といひます。ごくこまかな氷の結晶の集つたもので、雲の中でもいちばん高く、八千メートルから一萬二千メートルの高さに、浮かんでゐます。どこまでもこまやかで、すつきりした感じの雲です。天女の輕い舞の袖を思はせるやうな雲です。

ところで、この雲がだんだんふえてひろがりだすと、すつきりした感じがなくなつて、形がぼやけて來ます。のちには、ごく薄い、白い絹か何かで空をおほつたやうになりますから、俗に薄雲といひます。太陽や月が、大きなかさを着るのはこの雲のかかつた時で、かさの中に星が見えれば天氣、さうでなければ、雨だなどといひます。とにかく、そろそろ天氣がくづれるなと思はせるのに似てゐるのでさば雲といひ、またこの雲が出るといわしの大漁があるといふので、いわし雲ともいひますが、見たところはさびしい雲です。夜、この雲の續く果に、半月がうつすらとかかつてゐるのは、殊にさうした感じを深くします。天候惡變の兆といはれる雲で、そばに黑い雲が龍のやうに續いてゐる場合には、雨の近いことほとんど受合ひだといひます。

いわし雲よりぐつと大きな塊になつて、群生する白い雲があります。俗にむら雲といつてゐますが、西洋ではよく牧場の群羊にたとへます。青空に綿を大きくちぎつて、あとからあとから投げ出したやうで、なかなか盛んな感じのする雲です。

いわし雲がぐんぐんふえて來ると、空一帶が灰色になつて、何だか頭を押さへつけられさうになります。太陽でも、月でも、おぼろにしか見えません。照りもせず曇

りもはてぬ春の夜のおぼろ月とは、かういふ雲のかかつた場合ですが、このおぼろ雲は、天候の前兆としてはいよいよ惡い方だといひます。

むら雲・おぼろ雲は、卷雲や、薄雲・いわし雲などより低く、四五千メートルのところに浮かんでゐます。

青空に、薄黒い雲がみなぎることがあります。雨雲に似てゐますが、ところどころに青空が見え、雲の端々が白く見えて、その間から日光がもれたりします。もくもくと大きくかたまつたり、また時にそれが島のうねのやうに、天の一方から他方へ幾條か連なつたりすることがあります。曇り雲とか、ね雲とかいはれる雲です。

雨雲はきまつた形がなく、空いつぱいに薄黒くおほふもので、亂雲と呼ばれてゐます。いちばん陰氣で、いやな感じの雲であることはいふまでもありません。曇り雲と同じく、二千メートル以下にある雲です。

雨の降つたあげく、山の間などから流れるやうにさべい雲です。高さは五百メートルぐらゐですから、まつたく手に取れさうに見えます。

天氣のよい日、底が平で、上が山の峯のやうに積みあがつた形に現れる白い雲は、積雲といひますが、夏の日など、峯が恐しいほどむくむくとふくれあがつたのは、俗にいふ入道雲です。强烈な日光に照らされた入道雲が、まぶしいほど、銀白色または銀鼠色にかがやくのを見ると、雲の王者といひたい感じがします。俳句で「雲の峯」といふのも、この入道雲です。積雪は二千メートル以下の高さですが、入道雲の頂になると、六千メートルから八千メートルの高さになります。その頂が開いたのは、朝顔雲とか、かなとこ雲とかいつて、雷雨を起したり、時にひようを降らしたりします。一天にはかに墨を流したやうに曇つて、天地も暗くなるのは、かうしたすばらしく厚い雲によつて、日光がさへぎられるからです。卷雲のかぼそい女性的な美しさに比べると、積雲や、入道

八　山の朝

ふと、目がさめる。

遠くの方から、小鳥の聲が枕もとへ流れるやうに聞えて來る。まだ、なかば眠りからさめない心のうちに、山の夜明けだといふことが浮かぶ。

はね起きて窓を開いた。つめたい空氣が、吸ひつけられるやうに室の中へしのびこむ。首筋に水晶のはけがさはつたやうなつめたさである。まだ、朝の太陽はのぼつてゐない。薄明の天地の中で、山々の薄黒い姿が、だまつて眠つてゐる。

山小屋の重い戸びらを音もなく開き、素足に草履をはいて、露深い草の小道におり立つ。生き生きとした小鳥の聲が、あたりの靜けさをふるはせて、頭の上から降り注いで來る。このにぎやかな聲の絶え間を縫つて、どこかすかに聞えて來る。

山からわき流れる清水が、かけひをまつしぐらにかけ拔けて通る。玉のやうな、清らかな水を兩手にすくひあげると、こほりつくやうなつめたさが、全身にしみとほる。この水で口をすすぎ顏を洗ふと、心の底までが清められるやうな氣持がする。胸を張つて、思ひきり深く朝の山の空氣を吸ふ。

山小屋の前の小道をくだつて行くと、そよ風が頬にこちよい。なら・かへで・ぶな・くりなどの木々が茂り合つて、頭の上を自然の天蓋でかざつてくれる。夜明けに近い薄あかりが、重なり合つた葉の層を通して落ちて來る。綠色のガラスを張りめぐらした部屋の中に、たたずんでゐるやうである。一々の鳴き聲を聞きわけることができないやうに、鳥の聲がにぎやかに聞えて來る。短い鋭さの中にも、どこかやさしさのある小鳥の聲に混つて、太く口の中でふくんだやうに鳴く山鳩の聲が聞えて

昭和二十一年三月二日　翻刻印刷
昭和二十一年三月三十日　翻刻發行
（原初二十一年三月二日文部省檢定濟）

初等科國語七　第六學年用（第一分冊）
定價　金五拾錢

著作權所有　著作兼發行者　文部省

Approved by Ministry of Education (Date Mar. 2, 1946.)

東京都小石川區久堅町一〇八番地
翻刻發行兼印刷者　日本書籍株式會社
代表者　大橋光吉
東京都小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　日本書籍株式會社

發行所　東京都小石川區久堅町一〇八番地
日本書籍株式會社

ろがるやうに續いて走る。この美しい木々の綠と、さわやかな鳥の聲のごちそうを前にして、しんせつな山のお招きの席に、しばらくは、すべてを忘れて立つてゐた。

林の中を、奥へ奥へと進んで行くにしたがつて、小川のせせらぎはだんだん高く聞えて來る。林を出はづれて、頭の上の綠のおほひが盡きてしまつた時、いつのまにのぼつたのか、朝の日の光が、石を嚙んで流れる水の上にをどつてゐる。

危ふげにかけ渡された一本の丸木橋の上を、靜かに渡る。この丸木橋に立つて、朝の太陽の前に身じまひを正し始めた高い山々の針葉樹林を見あげる。きりのやうにとがつた梢の先を天に向けて眞直に立つものは、かうやまきである。ふさふさした枝の冠をいただいて立つてゐるのは、檜である。

この深山の朝の靈氣にふれるため、私はここまでのぼつて來たのだ。

九　燕岳に登る

「出發。」

山田先生の聲が、中房溫泉旅館の庭に勇ましく響き渡つた。午前七時である。きのふの雨はからりと晴れて、太陽は、ほがらかにこの溫泉の谷間を照らしてゐる。

ルックサック・水筒・金剛杖の身支度もかひがひしく、ぼくらは、小鳥のやうにをどる胸を押さへながら、つり橋を渡つた。ごうごうと鳴る激流の上に、高い橋がぐらぐら動くのが、愉快でたまらなかつた。

道はすぐ登りになる。かちりかちりと、杖が岩に鳴つた。前の人の足あとをふみしめるやうに、一歩一歩登つ